

くじらのなぞ

峰雪肇

人には第六感ってのがあある。

見ることも聞くことでも、かぐことでもなくって、触るさわことでも味わうことでもない、六つ目の感覚。それが第六感。たいていの人のものはほんとうによわいものだから、それに気づくこともないみたいなんだけど、まれにその感覚を自由にあやつれる人があらわ現れる。

じゃあ、それはどんなものかって？

それはね、気持ちを読むチカラなんだ。

どんなことを思ってるのかを感じられる能力。のうりよく

だけどそのほとんどは人の気持ちを読むんじゃない。

植物の気持ちだったり動物の気持ちだったり。そういうものたちと気持ちを通わせるんだ。机つくえとかえんぴつの気持ちがわかる人も、もしかするといえるのかもしれない。

ぼくにこの第六感について教えてくれたケイコおばさんは、動物のばあいが多いと言っていた。ねことか犬とか。でも、その人がその動物を好きかどうかは、あんまり関係ないみたい。だって生まれる前から決まってるから。

ぼくはどうせなら、ペンギンの気持ちを讀んでみたかったんだけどなあ。

まあしようがないけどさ。

そういえば、ぼくが誰だれの気持ちを読めるかはまだ言ってなかったね。

ぼくの場合はちよつと特殊とくしゅでね……

赤ん坊ぼうの気持ちが、分かるんだ。

ときどき、赤ちゃんはびっくりするような言葉を知っている。

そのなぞを解ときあかすのが、ぼくは好きだ。

※

夏の太陽がじりじりと照りつける土曜日のお昼すぎ、ぼくは出かけていた。

汗あせをかかないようできるだけ日かげの中を進んで、家から歩いて八分くらいのケイコおばさんの家へ行った。

ケイコおばさんというのは、ぼくの家くの近くで暮らしている女のひとのこと。

でも、家に行くのは、はじめてだ。

「こんにちは、ケイコおばさん！」

うでどけい

火冬

小学三年生の時のことです。アキオくんは、生まれてはじめて自分の腕時計を買って22
もらいました。お父さんがいつも仕事に行くときにつけていた、ピカピカ光る銀色の腕
時計がうらやましいなど、ずっと思っていたからです。それはアキオくんにとって、まさ
に大人っぽさそのものに見えました。

なので、進級祝いとして腕時計を買ってもらったとき、ほんとうはアキオ
くんもお父さんと同じで、銀色のものがいいなと思っていました。でも、アキオくんがそ
う言うと、お父さんは

「アキオに銀はちよつとはやいなあ」

と笑いながら言うので、しかたがなく黒色のものがまんすることになりました。はやく
大人になって、自分もお父さんみたいに銀色の腕時計がつけられるようになりたいと、ア
キオくんは心のなかで思いました。

アキオくんが時計の読みかたを覚えたのは二年生の後半のことです。

一年生のときにはもう時計の授業がありました。アキオくんはなかなか読み方を覚
えることができませんでした。まわりのみんなが少しずつ読めるようになっていくのを

見ながら、

「どうしてぼくはぜんぜん読めるようにならないんだろう？」

と不思議に思っていました。

二年生に進級しても、しばらくのあいだは、時計は読めないままでした。短い針と長い針の違が、アキオくんにはいまいちよくわからなかったのです。普段からおっとりした性格のアキオくんでしたが、さすがに少し不安になってきました。

「このまま一生時計が読めなかったら、みんなに笑われちゃうかもしれない」

そんなふうに考えたアキオくんは、いそいそでお父さんとお母さんに手伝ってもらい、家で特訓をすることにしました。ときどきお父さんとお母さんに、

「アキオ、今なんじ？」

と聞いてもらって、アキオくんはうんうんとうねりながら必死にその時間をこたえるのです。

そうしてようやく二年生の秋くらいになると、アキオくんもちやんと時計が読めるようになっていました。短い針と長い針の役割についても、完全に納得したわけではありませんでしたが、すっかり覚えることができました。

風
に
な
り
た
い

杏
璃

ぼくは走るのが好きです。走る前にはしっかりと準備運動をします。その前にくつのひもを二重にしぼってほどけないようにしないといけません。ほどけたら結びなおすために走るのをやめないといけないのです。ひざを曲げたり伸ばしたりしてじっとしていた足をほぐします。これをしないと走っていると足がいたくなって、楽しく走れません。ついでに体全部を動かしてこれから走るぞと気合いをいれます。お水は走るすぐ前に飲んではいけません。走っている間にお腹なかの中でタプタプとしてわき腹ほらがいたくなってしまいます。だからぼくは洗せんたくものをたたんだときにお水をコップ一杯飲いっぱいみました。うれしいが全部終わったら、やっと出発です。家の中に向かって大きな声でいってきますとさげびます。返事はなくてもこれをしないと出発できません。

走り出したら、足のようすをたしかめながらゆっくりと走ります。今日の空のようすや空気を感じながらゆっくりと走ります。いけそうだなと思ったところでスピードアップ。少しすると息が苦しくなってきました。でもそれもちよつとだけ。坂を上ってから下りに入ると息の苦しさも足の裏うらが地面をたたくいたみもなくなります。ほほをなでるすずしい空気が走る楽しさを伝えてきます。ぼくはこうなることを「風」になると言っています。

いつかお姫様に

齋藤紅音

「アブラカタブラ・メタモルフオーゼ！」

私がそう唱わたしえると、目の前の女の子の姿すがたは、みすばらしいワンピースからかわいいピンク色のドレスに早変わり！ 袖そではまん丸、胸元むなもとにはパールのネックレス、そして腰こしから下は大きなリボンとふわふわのフリルとレース。今日も私の魔法まほうはカンペキ！
ついでに女の子の隣となりにあるカボチャやネズミたちに向かつて杖つえを振ふると、細かい金属細工きんぞくざいくがほどこされた大きくて立派りっぱな馬車と、すらりとした御者ぎよしやが現あらわれる。

「これであなとも舞踏会ぶとうかいへ行いってらっしゃい」

私がそう言うと、彼女はぽつと満面の笑みを浮うかべた。

「ありがとう、魔女さん！ 行ってきます」

女の子は嬉うれしそうに馬車ばしやに乗り込こむと、丘おかにあるお城おしろへと向かつて行った。

「はあー」

やっぱり久ひさしぶりの労働らうどんは疲つかれる。思わず私は切り株かぶの上にしゃがみ込んで、いちごミルクを飲ほみ干ほす。仕事終いっぱいわりの一杯いっぱいは最高！

知らない人いちおうに一応説明いちおうしておく、私の仕事しごとは、魔法で貧ますしい女の子を变身へんしんさせて、

舞踏会に連れて行ってあげること。女の子たちはかわいいので、だいたいそこで貴族、うまいければ王子様に見初められて嫁いで行く。『シンデレラ』というおとぎ話の世界の話だと思っている人がほとんどだけど、私たちは実在していて、もつとたくさんの子たちの役に立っているの。

ため息をついていると、ふわふわの黒猫と白猫が近寄ってきた。二匹は私の使い魔だ。「もう疲れたのか。さすが二百五十歳のオバアサンだな」
そうやって悪態をつくのは、黒猫のノワール。主人には敬意を払えって言っているのに、彼はいつつもこうだから、もう半分あきらめている。

「何よ、私はまだ若くてピチピチよ」

「これくらいの仕事でへばってる奴が？」

「まあまあ、魔女と普通の人間は歳をとる速さが違うから。リルちゃんの見・た・目・は・十・五・六歳の女の子と変わらないよ」

「そうよね、ブランカ！ あなたはわかってくれると思ってたわ！」

私は少し引っかかりながらも、優しいブランカの白い毛でおおわれた手を取る。ブランカはノワールと兄弟なのに大違いだわ！ 肉球がふにふにで気持ちいい。

幽霊屋敷

シラタキ

「なあ、知ってるか。あの幽霊屋敷、本当に幽霊が出たらしいぞ」

太陽がカンカンに照った真夏の休日。草野球で疲れた身体を木陰で休めていたジヨンは唐突に幽霊屋敷の話をし始めた。

半年ほど前に町の外れに建てられた大きな屋敷は今、片田舎なこの町で一番ホットな噂話だった。それは黒を基調とした高貴さや気品を感じさせるシックな屋敷で、五十人は優に住めるほど大きく、敷地内には鮮やかな赤色のバラを無数に咲かせる庭園が拵えられ、無断での侵入を阻む黒い鉄柵が敷地を囲い、一種の芸術作品のような門まで置かれていた。無駄に広く自然が豊かなことしか取り柄がない片田舎の町には似合わない高貴な屋敷に、町の人たちはさる貴族の末裔でも来るのかと思ったほどだった。しかし完成から一か月経っても、二か月経っても、一向に屋敷に住んでいる人を見ることができない。週に一回荷物が配達されたり、屋敷や庭園が綺麗に保たれたりしていることから誰かが住んでいるのは間違いないのであるが、屋敷のカーテンは閉まり切り、外からその姿を確認することはできず、宅配員ですら荷物はいつも玄関に置くだけで家の人とはあったことがないと言う。そんな状態なものだから、次第に誰からもなくあの家に住んでいるのは幽霊だ、なんて噂が出回り始め、結果その屋敷は「幽霊

屋敷」と町の人たちに呼ばれるようになった。

そんな屋敷で本当に幽霊を見たのは、ご近所のウイイルおじさんなのだそうだ。酔いを覚ますため少し辺りを散歩していたある日の夜、彼は幽霊屋敷の一部屋のカーテンが開け放たれ、赤いランプの光が漏れ出ていることに気が付いた。驚いて目を凝らすと、窓辺にはさらに、ランプに照らされてうつすらと長い髪の女性のシルエツトすら見えるではないか。

噂の幽霊屋敷の住人を一目見るチャンスだったが、光が弱すぎて顔がはつきりとは見えなかった。そこで彼は、スマホで女性の写真を撮った。一人の大人として隠し撮りをする罪悪感はあるが、それよりも好奇心が勝っていた。

彼は早速写真を確認してみたが、カメラに収められているのは何故か赤い光に照らされた窓辺だけだった。おかしいと感じた彼がもう一度窓辺へ視線を向けると、やはりそこには女性がいた。ワイングラスを片手に窓の外を眺めている女性のシルエツトがはつきりとそこに見えた。すつと背中に寒気が走った。それを振り払うように、酔いすぎただけだと自分に言い訳して、彼はもう一度カメラを彼女に向けた。

やはり画面に彼女の姿は映らなかった。

龍のすみか

青嶺

父に連れられて市へ買い物に出たのは、冬の朝のことだった。その日はからりと晴れていて、空気はぴんと張りつめたように冷たかった。それでも市は人でごった返して、人いきれの中でシエンはうつすらと汗をかいた。

野菜や魚、お茶など必要なものを一通り買いそろえてしまつてから、父とシエンの二人は市の活気を楽しむように露店を見て回つた。金物、肉、宝石、塩、櫛、何に使うのかわからない箱、布きれ、菓子、油―雑多な露店が無秩序に並び、それぞれの売り子が声を張り上げて客を呼び込むさまは見ていて飽きなかつた。横目でそれらを眺めながら、人混みの中ではぐれないように、必死に父について歩いていったシエンは、不意に立ち止まつた父の背中にぶつかつてしまつた。

「ごめんなさい」

小声でそう言つて顔を上げたシエンの目に入つたのは、いくつもの、目の粗い竹籠だった。父はその竹籠をじつと見つめている。シエンも同じように籠を見て、そしてそれぞれに何か生き物が入れられているのを見つけた。ぎよろりとした鋭い目と、鈍く光を反す二本の角に、つやつやとした青緑色の鱗が波打つように動いている。

―龍だ。

シエンはしばしその美しさに見入った。間近で見るのは初めてだったのだ。角は上等な香木に似にていて、鱗におおわれた体は、龍が身動きするたびに波が立ち、ちようど夏の河かわのように見えた。そして何よりその神々こうごうしさが、シエンの心を捕とらえて離はなさなかったのだ。

トカゲほどの大きさから大きなへびくらいのもので、小さい龍なんびきが何匹も、この露店で売られている。ああ、こんな美しいものを飼かえたら、どんなにすてきだろう。

シエンが龍に見とれている間に、父と店主との間で何か話がまとまったらしい。期待していた通り、店主が父に籠わたを一つ手渡した。

○

「どうしてこの龍りゆうにしたの」

家に帰ると、シエンは父にたずねた。父が買った龍は、他の龍ほど美しくなかったのだ。鱗うろこは鈍色にびいろで、なんだか鑄鉄ちゆうてつみたいに見えるし、角は小さいし、金色の目だつてど